

からも離れ、学院同窓会の存在を知り、出席したのは戦後四十三年を経た、昭和六十三年であった。『おお、生きていたのか』と同期生に今浦島のように懐かしがられた。太田氏も七十六歳。二人のまな娘も嫁ぎ、愛妻と共に悠々自適の年金生活。趣味のロシア語もますます研究を重ね、円満高潔な人格はだから愛されている。

(岐阜県引揚者団体連合会)

理事長 川村 一正

中国残留八年の回想

東京都 都 丸 泰 延

(一) 昭和二十年三月北滿ハルビンへ旅立つ

昭和十五年四月「質実剛健」の校風をもつ都心の中学へ入学した。五年間は戦時下の教育を受け、平凡な軍国少年の意識が涵養された。体格は、身長が百五センチメートルから百七十センチメートルに成長し、

体重が三十九キログラムから五十六キログラムに増加して並であった。運動は、長距離走や強歩行軍などの持久力に強く剣道は初段だった。学科は英・数・国・漢が重要視された。英語は大好きで神田美土代町のY M C Aへ夜間の英語を勉強に通った。数学は幾何の補習を受けた。国・漢は比較的好きな科目だった。中学四年当時のメモを見ると、六月、築地の海軍経理学校視力不足で不合格、八月、軽井沢夏期錬成へ三八式歩兵銃携行し、炎天下一週間の猛訓練終了。

昭和十九年五年生に進むと北区の理研の工場へ学徒動員される。機関砲の部品組立職場で係から言われた通り仕上げを担当する。当時、東京空襲があり、日中グラマン戦闘機の機銃掃射に遭い、夜はB29爆撃機の焼夷弾投下による火災発生で火焰が夜空高く上がる。

十月には第二次動員令が発令されていよいよ勉学の道は閉ざされる。受験誌「学生」の紹介記事で満州国国立大学哈爾濱学院を知る。ロシア人の住む街、外務省や大東亜省の委託学生制度、何となく憧れる大陸という言葉の余韻に酔う自分を抑えられなくなる。受験

申込みの内申書などを送り、北陸金沢市を指定した通知を受ける。十二月雪の金沢で受験したが、英語の答案提出順に、東京のF君、小諸のY君の周りに受験生が集まり、青春の話の輪が広がった。金沢では他校の入学試験もあつた様子で、帰途の北陸線は学生が多かつた。

昭和二十年一月、合格通知を受けると、東京駅前、丸ビル一階の交通公社の地下通路入口に並んでハルビン行きの切符を買う。二月二十三日東京に降雪。

三月上旬、東京駅のホームで両親と別れ下関行き普通列車に乗る。一人息子を送る母は涙を見せず、父は涙ぐむ。一昼夜かけて下関に着く。関釜連絡船の出航予定が立たず、下関と博多を往復する。十日間ほど待つ間、絶対にハルビンに行くと自分自身に言い聞かせる。ようやく下関から朝鮮の麗水行きの出航が決まり、生まれて初めての外洋船に乗船した。麗水に着くと異様な雰囲気の内心奮えるが、満州鉄道の列車に乗り、知り合つた満鉄社員の青年が親切に案内してくれて無事奉天駅に到着した。

(二) 四カ月の学院生活

遥々と大陸にきたという実感を抱き、奉天駅の改札口を出ると「哈爾濱学院の学生か」と声を掛けられる。周囲を見回し、私に声を掛けられたと分かつた時の安堵感と親近感忘れられない。ハルビン行き列車に乗るまでの間、大変お世話になる。朝方麗水を出て夕方安東の税関を通関し翌日に奉天到着まで、食事らしい物は口にしていない。さぞ、薄汚い格好で食べ物がかついたことだろう。学院先輩と分かり名前を尋ねたが、教えてくれなかつた。これが大陸風なのかなと、一瞬分からぬことを想像してみた。駅で先輩の見送りをうけ、挨拶もそこそこに列車に乗った。

南寮に入ると、先にきた新入生の大食漢ぶりの話で持ち切りだった。一回に豚饅頭三十個も食べるなど、当地の人には想像外だったらしい。本校舎で入學式が行われた。私には、外地出身の学生の姿が際立って力強く感じられた。

授業で印象的なのは、初級露語会話だった。白系ロシア夫人の講師が子供に教えるように身振り手振りよ

ろしく、ゆっくりと大きな声で発音を繰り返した。同期生は出身や経験の差があり、関東軍委託生のG君たちがアルコール代わりに貨物車の燃料を飲む姿に驚いたりもした。学外では、復活祭の夜、中央寺院内で聞いた讚美歌の神秘的響きに酔い、市街地を走るタクシー、ピヤホールや飯店の自由な営業風景など、東京とは全く違う社会に目を疑った。

学業は一カ月授業を受けると試験があり、学級の編成替えがあった。軍事教練は敵前戦闘訓練を頻繁に行った。六月には動員令が下り、自動車滑空部員以外の者は満州飛行機北機械製作所に勤労働員される。私は航空機エンジンのマスターシリンダー組立職場に配属される。日立製作所の部品は最高の品質だが、私たちの腕は最低だったことが残念だった。

八月九日未明、ソ連爆撃機がハルビン郊外に爆弾を投下する。

八月十五日正午、耳をそば立てながら終戦の玉音放送を聴いた。しばらく茫然として頭の中が空っぽになる。渋谷院長は全学生に「これから生きて行くことは

大変難しいことであるが、必ず生き抜くように」との訓話を懇々と話された。その四日後、ご夫妻は自刃された辞世の句「北滿にいつかは春のめぐりきて、大和櫻の花や咲くらん」を残された。父と慕う院長を失い深い悲しみに沈む。敗戦と同時にハルビンの市街に数万本の青天白日旗が乱立する光景に、周りにはみんな敵なのだと感じて、気が引き締まった。

(三) ソ連軍に抑留される

寮の中庭で校旗、文書、書類などを焼く。八月二十六日寮は閉鎖と決定し、行き先のない私は満鉄派遣生のW先輩に連れられて、同期のHらと共にハルビン駅近くの満鉄宿舍に落ち着く。所用で、市内に親と住む同期F君宅を訪ねた。家人が帰途は「危険」だからと馬車を用意し、バナマ帽をいただく。帰途、駅近くの陸橋のたもとで日本人狩りの検問をしていたが、満人の馭者と馬車のためか通り抜けた。坂を上り南崗の秋林近くまでくると、馭者がこれから先は危険と言う。止むなく私は馬車を降りた。と偶然同期のO君が大声で私を呼ぶ。彼の手引きで隠れ家に案内された。

数日後、ソ連軍に拉致される際、身ぐるみ剥がされて肌身に付けていた親からの送金千数百円の日本円を略奪される。ソ連兵に連行され、郊外の香坊收容所に收容された。所内では、台上に立った軍属らしき日本人が「ソ連軍は捕虜として扱うが、我々は天皇陛下の赤子である」と大声でどなっていた。移動のための班編成があり、小銭の配給があった。北満の炭礦か、シベリアへ連れて行かれる、などと憶測が流れる。心の不安を紛らわすために、中国人の物売りから煙草とマッチを買い、初めて煙草を吹かした。

行く先不明のまま最初は無蓋車で移動した。その後はカンカン照りの日も、雨の日も「マンドリンの銃口」に脅迫されながら海林、牡丹江へと行軍を続ける。特に雨降りて道がぬかるみ、隊列が乱れると監視のソ連兵が「ダワイ」とどなりながら威嚇射撃を行い、不幸にも流れ弾に当たった者もいた。道路の凸凹や泥溜りに足を取られて転ぶ者もいた。行軍中の小休止の時間を見計らって、鉄兜で高粱飯を炊いたが、生煮えを食べたこともあった。

海林の收容所では丘の斜面に穴を掘って暮らした。雨降りが続き着替えもなくただ耐えるだけだった。太陽の下では日光浴と衣類に巣くう虱シラミを潰すことが大切な作業だった。

ソ連軍の暴行や略奪に遭った年配の人たちは、私が学院生だと分かると「ロシア語のダワイに変わる日本語を是非教えてくれ」と言った。海林の收容所内を部隊で移動中、中学の同期西島君の部隊とすれ違った。全く偶然の出来事だったが、東京農大の東寧農場にきて早々終戦とのことで立話しかできなかった。彼は、愛称猫ちゃんと呼ばれ心の優しい青年だったが、後日、私は長春で訃報を知った。

(四) 新京(現長春)へ南下する

十月下旬、牡丹江からハルビンにやっと帰ることができた。満鉄宿舎にH君を訪ね満鉄派遣生のT先輩と三人で無蓋車の難民列車に乗り、一昼夜かけて新京に到着し、給水塔近くの満鉄社宅に落ち着く。H君と二人で線路工夫に応募し採用される。

翌日から昼の弁当に高粱の握り飯を持参、破れゴム

長靴を履き、鶴嘴を肩に寛城子駅へ、片道約四キロの道を徒歩で往復する。北風に曝されながら、折れた枕木を引き出しバラスを地盤に打ち込みレールを持ち上げ、枕木を入れ換え鶴嘴を振る。ソ連兵の監視の下で、不慣れた重労働の日々が続く。そのレールの上を戦利品(空のドラム缶まで山積み)を満載した貨車が北上する。また日本兵をすし詰めにした有蓋貨車も連日北上して行く。

我々に手を振りながら寛城子を通過して行く何十万の兵士が、極寒のシベリアで、これからどんな残酷な目に遭うのだろうかと。貨車の屋根には自動小銃をもったソ連兵が座っていた。無条件降伏の悔しさを思い知らされた。一日の作業が終わる日君と二人で折れた枕木を担いでレール伝いに帰路につく。肩に食い込む枕木に、何度も何度も休みながら社宅に辿り着く。一本の枕木が十日分ぐらいの暖房用燃料になった。休日には二人で鋸を挽き鉋で割る。十一月中旬に線路工夫の仕事は終わった。

ちょうどそのころ、学院の森教授が満鉄本社で通訳

をされていることが分かり、三人そろって仕事のお願いに行く。近日中に新京から奉天とハルビンへ旅客列車が運行を始めるから、通訳として乗務するようにとの紹介を受ける。その上三人は久方ぶりに、すき焼を腹いっぱい御馳走になった。早速、新京駅二階の列車区を訪ねると、教授の根回しがあり、即日採用された。日君と私はロシア語会話の本を探し、旅行編を丸暗記に取り掛かる。そしてその日から列車区の事務室をねぐらと決めた。

昼夜、暖房が通り、電熱器の上の大きな薬缶(やかん)がいつもチンチン音をたて安心感があり、炊事もできた。職員の退社後は机の上でベッドに早変わりした。乗務でハルビン駅に夜到着すると、列車区の机の上での仮眠が日常だった。満州の初めての冬を越す持ち物は、二枚の毛布と学院支給のシュールパシか無かったからだ。私はN車掌と組み、日君はA車掌との乗務でハルビンと奉天を交互に勤務し、新京に帰ると一日休みとなる。

ある休み明けの日に三人揃って列車区にいと、B車掌から声が掛かる。「君たちは毎晩机の上で寝てい

るがなぜか」と尋ねられた。寒くて寝るところがない
と言うと、露月町のB氏の満鉄住宅に連れて行かれ、
共同生活に仲間入りする。

(4) 昭和二十一年一月一日事故に遭う

新京発、夕刻に奉天着の列車に乗務した。N車掌か
ら「ソ連軍の占領状況を直接、日本政府に報告する任
務を持つ方々が同行される」と聞いていた。奉天駅到
着後乗客を降ろし、客車だけ駅のホームに停車中に事
件が発生する。あたりは暗闇、先頭車両の一両で車両
灯を消し、前方ドア寄りの位置にN車掌と要人が打合
せをしていた。私は後方のドアの端で監視待機してい
た。不気味なくらい静寂な闇の中突然「通訳、通訳」
と呼ぶ声があった。「ダー、ダー、ダー」と軍靴の音と
同時に大男が「ダワイノ」と甲高い声で叫ぶ。私の腕
が反射的にドアをあけると、左肩にナイフを刺して、
ソ連兵は脱兎のごとく車外に逃げ去った。N車掌が駆
け寄り「大丈夫か」の声に、「刺されました」と返事
をしながら照明のあるホームに飛び出す。N氏に連れ
られて駅の司令部に報告し、医務室で日本人医師の処

置を受けた。

シューバの上から刺されたので、傷は浅くてすんだ
が、今も二センチほどの傷跡が残っている。

医師の状況説明は「日が沈むと、列車到着の度にど
こからかソ連兵が現れ、刀剣で中国人旅客に切り付け、
荷物や金品を強奪する。先刻も顔面血まみれになり泣
きわめく中国人の手当てをしたところだ」とのこと
で状況が分かる。

翌一月二日乗務で新京へ帰任した。その後、急に体
の調子が悪くなり、N車掌と駅の医務室を訪ね診察を
受けた結果、結核と診断される。治療薬は入手不能と
言われ、がっくりとして力が抜けた。床に臥して四〇
度以上の高熱が続き、うわ言を言うようになる。N氏
の手配で敷島女学校に隔離される。校舎が仮設の難民
病院となっており、病名は発疹チフスとも腸チフスと
もいわれた。病気中はいつも「生きて日本に帰ること」
を思い病魔と闘った。病室とは名ばかりで、床にアン
ペラ一枚を敷いただけだったが、N氏の努力で薬品類
から付添婦まで、全ての面倒を見ていただき九死に一

生を得る。当時の床擦れの跡が四センチ大の円形で今も残っている。

三月末に骨と皮になって退院し、満鉄社宅に居候する。共同生活は列車区の関係で、乳飲子を抱えたY夫人は（車掌の夫が関東軍首脳と行動し、消息不明）病弱気味、車掌のM夫婦は二人の幼児を抱え、独身の車掌M氏は個人主義に徹し、自由に振る舞い外泊がち、S夫婦は主人が車掌で、夫人は食堂車勤務だったとかで新婚、他にH君と私と寮長格のN車掌だった。私が入院中にソ連軍が撤退し、日本軍の将校や士官をゲーパーウに密告した中国人や、日本人も一緒に姿を消したという。

昭和二十一年四月中旬に八路軍が市街を占領すると、五月下旬にはアメリカ式最新兵器を持つ、国民党正規軍が無血入城する。私が一人歩きのできない間、M氏が胴元で「コックリさん」と呼ぶ迷信を暇さえあればやった。神のお告げは「紛失物は病人が知っているはずだ」という結論を出す。N氏は「寮の高梁飯こうりゃんでは体力が付かない」と言って、体力回復のために全面的な

協力をしてくれた。

（六） 留用技工となる

五月下旬、国民党軍から日本人居留民会に対し「使役調達要求」が開始される。民会は各地区に割当てをする。社宅割当分は自ら進んで担当した。一番重労働だったのが「飛行場整備土木工事の使役」で一週間通った。軍人の監督下の土木作業なので労働に不慣れな人や、体力のない人は怠けていると判断され、作業中に棍棒で殴られたり、強い日差しと地面の照りかえしの熱気で倒れる日本人もいた。中国人の監督の中には、日本人に対する仕返しだとわめく者もいた。

六月には居留民会が具体的に帰国の準備を始めた。

当時の長春警備司令部に在籍し、日本人戦犯処理に係っていると称する老人がいた。私たち社宅の者は三井老人と呼んだ。自称和歌山の出身で、身内が和歌山新聞の社長、本人は北京大学の第一期留学生で、彼の妻は中国人で四馬路に住居があると言う。品の良い中国服を着こなし一見紳士風で、前歯が何本か欠けていた。N氏が四月ごろに公安局に捕まり一週間ほど留め

られたとき、老人の手配で釈放されたと聞いた。私の帰国の件でN氏と相談した結果、一年後、三井老人が帰国するので一緒に帰ることとし、それまで中国語を学んだ方がよいと言う結論となった。

民会は長春市日僑善後連絡処と名称が変わり、この世話で「東北保安司令官部戦車修理工廠留用技工」として中国残留が決まった。当面の仕事は、郊外の大工場で数多くの工作機械の据え付けだった。所属の黒岩という班長は、高職スタイルの背は低いが骨格は遅しく、現場での指示はテキパキとし、レベルや芯出しなどは必ず自ら確認した。学院同期のH君は七月帰国し、九月にはN氏夫妻も帰国した。私は、夫婦に「冬来たり人去りぬれば凍りゆく、地のはてなる海かな」の歌で名残りを惜しんだ。新京在住二十万人が残留者六千人に減ったという。機械の据え付けが終わると賃金不払いで工場は解散した。街には、醸造技術者、航空機エンジン技術者、豚の血からボタンを製造する技術者など、一匹狼風の人たちが残留していた。私は二年目の冬を無事に過ごすため、地下室の作業が主な

醸造工場で仕事をした。酷寒地の品質確保のため、合成葡萄酒やビールの発酵工程は地下室に設備された。

昭和二十二年、八路軍は新京の市街地を包囲し、食料品などの供給を押さえ始める。国民党の支配体制を内部崩壊させる手を打つ、学生の反政府運動と弾圧が繰り返されたらしい。私は現場を目撃していないが噂は聞いた。八月に技術者の第二次帰国が実施された。既に南下する鉄道は八路軍の支配下にある由で、自動車輸送となる。この帰国者の中に二人の自動車整備士がいた。一人の四十代の男は若い身籠もった内妻を、一服盛って天国に送り帰国した。雨上がりで日差しがやけにきつい日、他の一人の独身Sと私は遺体をリヤカーで墓地へ運んだ。Sが漏らした言葉で事実を知る。

(H) 八路軍新京を完全包囲

昭和二十二年春、国民党軍は八路軍の新京への送電線が破壊されることを想定して、自家発電設備や代替動力源を準備した。発電機、精米機、製粉機などの原動機として農業振興用水利局のディーゼル内燃機が使われた。これらは軍、官公庁、大学に優先的に利用さ

れ、一般企業は自動車のガソリンエンジンを取り外して使った。

ディーゼル内燃機の運転、修理はT氏の助手をしなから習得した。まず、手動でポンプと噴射ノズルの関係をテストして見せると、すぐ単身修理に追い出される。現場で臨機応変に自分で責任を持って対応することを求められる時代だった。点火位置の調整不良が原因で、不完全燃焼の爆発を起こし、クランクケースにひび割れ発生事故もあった。T氏の指示で水利局の倉庫に入り、新品の部品を取り外して、持ち出すことも重要な仕事だった。これらの部品は全部ドイツ製で、この場所以外で入手は不可能だった。満州中央銀行の自家発電用百五十馬力ディーゼル内燃機関も、私がバブル擦り合わせで稼働させた。同業の韓国人仲間と部品の融通や、街の諸情報を交換する間柄になる。ある日、ピストルの修理を頼まれ、荷馬車で郊外へ行くと、偶然に銃殺のその場面を畑の中に見た。十月、豊満ダムから新京市街への送電は止まった。

昭和二十三年を迎えると、市街地のあちらこちらで

銃声が響く日が多くなった。市街地から犬猫の姿が消え、多数の餓死者が出たという噂が流れる。送電が止まってから休む間もない程の仕事に追われる。設備が増えるよりも、故障修理の応急サービスが圧倒的に多くなった。ディーゼルの噴射ノズルの目詰まり、中古ノズルの磨耗による噴霧不良などが原因だった。

知人の紹介で、学院二十期の竹中先輩に初めてお会いした。先輩リーダーとして日本人居留民を連れ、八路軍包囲の真空地帯を突破する計画を持っておられた。誘いを受けたが、国民党軍の徹夜仕事で機会を失した。このころ国民党軍の食糧も底をついたようで、軍無線電台で出された食事に機械油が混入していたため、さすがの私も吐いて寝た。

(Ⅳ) 長春市政府農業科勤務

昭和二十三年十一月二日、八路軍は長春(新京)に無血入城する。市の人口約三十万人が残った者は、わずか三万人だという。八路軍と国民党軍とが入り替わる期間、私は韓国人技術者の勧めで、彼の家に匿(かく)われる。日本人は国民党の協力者として八路軍から狙われ

るから危険だという。韓国人の間には、特別の人脈や情報の入手ルートがあったらしい。

十一月下旬に彼が一人の中国青年を連れてきた。この人は共産党員で市政府の幹部だが、技術的な仕事で協力して欲しいという。私も仕事が欲しいので、市政府農業科の機械化農場計画に興味を持って参加した。科の技術者は数人で、中国人と日本人の共同作業である。最初は廃トラックを分解して使える部品を集め、シャーシーから足回りの組付け、エンジン、運転台などを取り付けて使えるトラックに仕上げることであった。

エンジン調整の最大の問題は、コンデンサー故障の頻発だった。新品は入手不能なので、中古品を苦心して使った。ある中国人は、メーカーの違う気化器を取り付け出力差に興味を持って細工をした。同僚の小野氏は法大生のころ、自動車部員だった由で、車の運転技術について指導を受けた。

昭和二十四年一月、市職員思想改造運動が始まる。中国語で「坦白^{ダンパイ}」という方法で、グループ単位で進める。まず職場の一人に、過去国民党への協力の事実関

係と、その思想背景を言わせる。この発言の内容について、全員で徹底的に追究する。思想的に糾弾し、共産党に忠誠を迫る方法である。農業科の職員たちは次第にエスカレートして、執務時間中も大声で討論する。日本人は例外だが、吊し上げを見ているようで気分が悪い。機械化農場の計画は具体化の見込みが立たず、私を呼んだ若い党員は結核にかかり、入院してしまった。党員の待遇は供給制という制度だった。一言で言えば、最少限の物資を現物支給される方法だ。食糧は、高粱と粟が主で、少量の米、油、塩など一日当たり何グラムと計算される。他に衣類、石鹸、タオルなどの日用品と金券は、煙草代程度のごく質素な生活だ。彼らは、常に大衆の模範であることを要求され、時間の制限もなく働いていた。

(ウ) 吉林市郊外の工場建設に参加

長春瀋陽地区の解放後、延吉市にあった製油工場を移転し、規模拡大の計画が進められた。吉林省政府は吉林市郊外の豊満ダム近くの旧日本軍工場跡地を利用することが決まり、吉林省工業廳の日本人技師長が長

春瀋陽地区を調査し、人材や資材を集めていた。私は農業科に勤務してから病院長の要請で、S外科病院に用心棒代わりに下宿していた。病院は広い建物だが、ほとんど看護婦宿舎のような感じだった。下宿中に、私の飢餓時代にできた左頸部リンパ腺腫瘍を摘出手術してもらった。K技師長が長春に出張するとS外科病院に宿泊し、新工場の建設や世間話などされた。技師長は東北帝大出身で英語は堪能、ドイツのライカのカメラをいつも持っているのが印象的だった。特に、私に対し基礎技術から勉強するようにと再三勧めていたのだ。

昭和二十四年初夏、農業科技師職を辞して、吉林省江南化工廠の見習技師として建設現場へ入った。中国人土木技術者の話では、旧海軍の風船爆弾のプラント工事中に終戦になった由。広大な敷地に建物の一辺、約八十メートルの正方形の赤煉瓦の壁だけの建物が八棟点在し、五十メートルぐらいのコンクリート煙突と奇妙なコントラストを描いていた。現場では、敷地や建物の測量を、ハルビン工大のK技師員の助手として

二人でやった。図面を引きレイアウト作成の準備をする。建設当初は寝場所不定で寝袋を持って常時移動した。建物の壁はあるが、屋根がない。屋根ができると、内部工事が始まり、私たちの居場所はなくなる。プラント建設上の最大の問題は、化学やプラントの専門家はいるが、製品の製造経験がないので品質保証をすることがだった。製品は極寒地用の変圧器油で、零下二〇度における品質保証である。新中国の経済復興計画に、当工場の生産が組み込まれているという。最初のテストプラントは、手持ちの機材を使い、わずか月産八トンの規模で試行錯誤の連続だった。実用機の設計は月産四百トンで製造ラインを稼働させた。その二年後、月産二千トン規模に拡大した。もしこの工場が国家計画を達成できなければ、五年後の無事帰国はどうだったか。

成功の第一要因は、K技師長を中心としたW、M両技師の技術力と、判断力にあったと思う。第二は時の中国人経営陣の能力と人間性にある。製品ができるまでは、顧客が使える商品を作れ。量産が進むと品質を

向上させよ。次はコストを下げるの号令だ。M機械技師の配下だった私や友人は、初めの一年間、毎日四時間未満の睡眠で設計と現場の掛け持ちで働いた。生産が軌道に乗ると宿舍など、福利施設がようやく整った。私は水や蒸気を全工場に供給する部門の責任者になる。

朝鮮戦争が始まると、ソ連軍の自動車部隊が吉林に集結した。同時に共産主義の公務員思想改造運動が始まる。三反運動といい、官僚主義に反対し、浪費に反対し、汚職に反対するというキャンペーンで、全従業員を動員し部門ごとに討論会を行う。操業上の過失や工事の不完全が原因で、起きた事故損失の追及も行われた。

党員や行政幹部の吊し上げを他人事と思っていたら、日本人から、業者と癒着していたとの私についての密告があった。大集会の壇上で数百人の従業員を前に、中国で「胆白（告白）^{たんぱく}」をさせられた。気持ち落ち着かせるために、一度失った命だと自分自身に言い聞かせた。幸い、韓国系の党員が私をかばってくれ無事に済んだ。

振り返って考えると、運動を盛り上げるための手段として使われた感じがする。自身の気楽さと娯楽のない工場敷地内での生活上、技術の工場だけに専念する五年間の暮らしを続ける。仕事の性格上、熟技術を専門的に、現場の実際問題解決上の課題として勉強した。日曜日には吉林市街まで、片道二時間の山道を徒歩で、旧関東軍M技師を訪ね、現場の難題解決のヒントを指導していただいた。

(1) 引揚げ後の生活

昭和二十八年八月八日、第四次興安丸で懐かしい祖国、日本の舞鶴港に入港した。父の出迎えを受け、父子で無事を喜んだ。時に、二十五歳だった。東京の自宅に戻ると、早速、親戚や関係先に父親と連れ立って挨拶回りをした。当面の生活信条として、平凡な生活をする事、現場技術者として生きること、個性を伸ばすことの三条件を決める。

八月下旬に池袋職案の担当者が豊島区内の燃焼機器メーカーの社長に推薦してくれる。面接試験即採用された。翌日から始業一時間前に出社し、工場の幹部や

工員とも仲良しになり、どんな仕事にも嫌な顔せず、他人の倍以上働いた。特に客先現場の取付工事や、試運転には作業服で立ち会い、現場の技術データを記録収集した。このことが、トラブルの解決や予防改善に後日役立った。入社当時、この業界全体の技術レベルは低く、技術書は洋書で米国メーカー出版物だけだった。技術の理解と英語力で、在日米軍調達部や、座間キャンプの入札担当となった。米軍基地の日本人技術顧問たちや、入札資格審査をパスした多くの一流企業の担当と顔見知りとなる。

基地の日本人の技術顧問の中に、ハルビン工大出身者がいた。最新の技術情報を得て、会社の業績拡大と私自身の社会的成長に役立った。

帰国後、しばらくは戦後産業復興の初期で、会社は作れば売れる状況だった。社内の技術水準に物足りなくなり、昭和三十四年二月大阪市の工業窯炉メーカーから招聘され、夫婦二人で赴任した。昭和四十一年末、全株式を三井物産重機部が取得し、翌年、三井物産から社長が派遣されると、昭和三年生まれの私たち三人

が取締役部長に命ぜられた。

昭和四十三年五月、新製品開発のため米国から西独へ業務出張し「技術についての取り組み姿勢の彼我の差」を知る。当時の機械部長は旅順工大出身で、ハルビン学院の私を特に指導していただいた。昭和四十五年、賃上げ交渉が決裂し、二百五十日のストライキとなり、水島と姫路の大規模工事を一人で監督した。

昭和五十一年一月、酷寒のシベリアを独りハバロフスクから、イルクーツク経由ブラーツクへロシア語学習の旅をした。三月親会社の推薦で新潟の精錬炉プラントメーカーへ転職し生産管理を担当。ソ連向け百億円のプロント引渡し成功の基礎条件を作った。

いささかなりと日ソ友好に役立ったことをうれしく思った。

【執筆者の横顔】

都丸泰延氏は昭和三年二月、東京麻布で生まれた生粋の江戸っ子である。「質実剛健」の校風を持つ駒込中学を卒業後、満州国の国立大学哈爾濱学院に進学し

たのが、終戦の年の昭和二十年四月であった。米軍による空襲が激しくなった本土から、大陸への雄飛を夢見て渡満したが、その夢もソ連軍の満州侵攻及び日本の敗戦のため、わずか五カ月間で消滅し、いきなり北満の地において流浪の難民と化したわけである。

しかし持ち前の頑健な体と精神力により、ソ連軍による日本人狩りにも耐え抜き、辛うじて新京(現長春)地区まで生還することができた。爾後、現地^じで鉄道の通訳として勤務し、危うくソ連軍の暴漢に殺されかけたり、結核と発疹チフスのため生命を落としかけたりしたが、周囲の人々の情けと都丸氏の強運さにより、昭和二十一年春のソ連軍の満州撤退まで生き残ることができた。

その後、八路軍(中共軍)と国民政府軍との勢力争いの中では、国民政府軍支配下の長春で、飛行場整備の土木工事の使役として酷使されたり、後半は留用技工として、工作機械の据え付けや自家発電設備の整備・維持を手伝わされたりして糊口を凌ぎ、翌昭和二十三年十一月の八路軍による長春の無血入城以降は、市政

府の農業科で機械化農場の建設計画などを手伝っていたが、昭和二十四年の夏、農業科技師職を辞して、吉林省南北工廠の見習い技術員として、旧海軍の風船爆弾プラント跡地の建設現場に入り、帰国する昭和二十八年八月まで、変圧器用油の製造プラントの建設に従事した。

中学では理数系の学科が弱くて、ロシア語の勉学を主とする哈爾濱学院へ進学した都丸氏が機械設備に興味を抱き、戦後の中国東北部(旧満州)で、新生中国の近代化のために青春を捧げ、そこで得た技術を生かし、帰国後も国内はもとより、海外における主要なプラント建設の機械設備技師として、活躍している。

(岐阜県引揚者団体連合会)

理事長 川村 一正